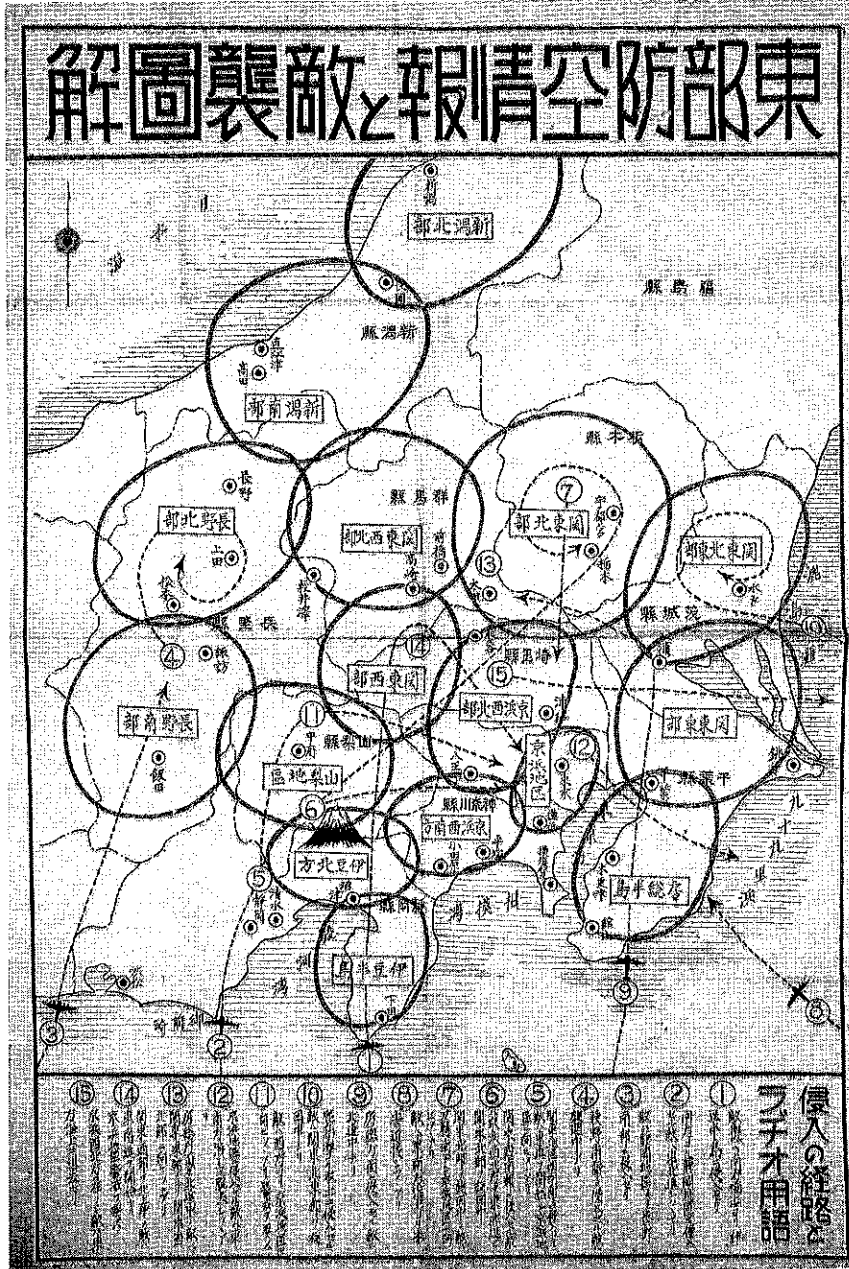


もくじ 空襲の情報を伝える 1P 小台延命寺と幻の復旧願書 2P
 鹿浜での子どもの生活⑥ 3P

足立史談

第562号

2014年12月15日
 足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 <25-308>



空襲の情報を伝える 防空情報の図解資料

■ラジオ放送で知る 太平洋戦争の末期、昭和19（一九四四）年からアメリカ軍の空襲が激しくなりました。東京では「東部軍管区情報」がラジオからながれ、警戒警報や空襲警報とともに各家庭では敵機接近を知りました。

海軍軍人で小説家だった海野十三（明治30・一八九七年〜昭和24年・一九四九年）は、昭和19年11月24日のこととして東部軍管区情報について次のように紹介しています。

東部防空情報と敵襲図解 米軍機の飛来経路を示した貼紙。各家庭に配布された。足立区立郷土博物館蔵

（海野十三「敗戦日記」）。敵の編隊は伊豆半島方面より侵入、なお後統部隊ありという東部軍管区情報は、今日の空襲が本格的であることを都民に知らせた。「東部軍管区情報」を都民が非常に期待するようになったのは、この日からだといっている。

この日は爆撃機B29、一一一機による東京への戦略爆撃の初日で翌昭和20年8月の終戦まで9カ月間にわたる空襲下のくらしが始まりました。

■貼紙とラジオ 上に掲げた「東部防空情報と敵襲図解」は各家庭に配

学童疎開70年 特別展

▼会場 足立区役所庁舎アトリウム
 ▼会期 平成27年 1/13（火）〜17（土）
 ▼時間 午前9時〜午後5時

▼郷土博物館の協働グループ「足立の学童疎開を語る会」では、昭和19年から始まった学童集団疎開から70年目の節目を迎え、区役所アトリウムで資料点を開催します。疎開した全26の国民学校（小学校）の情報や各種資料を展示する疎開体験者の展覧会です。ぜひご観覧ください。

▼お問先 郷土博物館
 （電話 3620-9393）

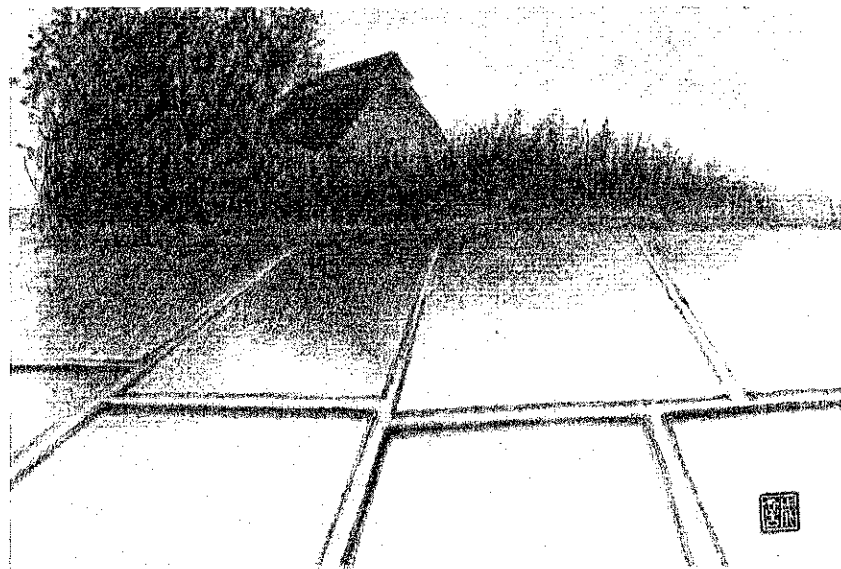
温かくなっている生ゴミ捨て場の山から採集できた。ドジョウはすぐ掛かるがぬるぬるして針をとるのに一苦労。フナは鱗を光らせ上がってくるので楽しくなる。でもガラスの金魚鉢や水槽がないから、桶やバケツに入れ、真上から青黒い背中を覗いて満足するほかない。で、顔の見えない小魚達を飼育する気持ちになれないのだ。

■エビガニ釣り 子供達はやけになつてエビガニ釣りに精を出す。田んぼを荒らすので大人達は歓迎だ。蛙をつかまえて皮をはぎ、足に縄を結びつけ堀へ放り込む。すぐさまエビガニが餌の蛙につかまって上がってくる。在来種とアメリカ産の渡来種が混在していたはずだが、ハサミの大きさでオスとメスを区別する程度、違いは教わらなかった。大きなハサミを振り上げ、向かって来る赤くつかつかついと、体のわりにハサミが小さく、おとなしい青緑色のものいる！それに殻が抜け変ったばかりのや、オスとメスの姿の違いなどがごっちゃになって良く分からなくなった。活発で居丈高なのが良く釣れた。田の畦などにはおとなしいのが多かった。釣り上げたエビガニの処分に困り、最後は隠れてそっと鶏小屋に投げ入れた。鶏たちは大騒ぎして取り合いを始める。誰にも見られていないのに、どうしたわけかこれがすぐばれてしまう。卵の黄身が赤味を増すの

だ！エビガニの殻の赤い色素成分が鶏の体の中で脂肪分に結びついて黄身へ集まるらしい。消化された餌の成分が体の中でたどる様子を目の当たりにできる、栄養学の生体実験をしていたことになる。

戦後の食糧難の最中、近隣の街中からエビガニ釣りにやつて来る、子供連れの家族を良く見かけた。エビガニ食べんの？と驚き顔で迎えながら、スルメイカを裂いた餌を見ては、カエルの方がぜんぜん良いんだよ！と、すっかり田舎の子然とした得意顔でカエル取りを手伝った。自分が疎開の身であることもとうに忘れ、面映ゆい格好良さを感じていた。

■ナマズとり 鹿浜では大きな台風遭遇しないですんだ。中型らしいのが来た時は、荒川上流の堤防が決壊し、関東平野を流れ下る洪水原が鹿浜一帯を覆い、刻々と水位を増して床下までどいたことがある。(※2)道が水没し、濁水の原が見渡す限り広がっていた。地面が見えないので深みにはまる危険があり、子供は水が引くまで外出禁止だ。島堀の川筋に沿う大きな流れが見えた。



水をかぶった水田 もっとも水が深いときはあぜ道まで水没した

中型台風のと、シジミの川の上流にある貯水堰が放水のために開かれることになった。それを聞きつけた竹ちゃん、大きな網をもって出掛けて行き、激流に仕掛けた。大きなナマズが七〇数匹上がった。運悪く少し下流で網を入れた人はわずかに数匹だったと聞く。わが家にもおすそわけがあり、珍味のナマズ料理をいただいた。美味と思ったが、肉も魚も二年近く食べていない状況では比べようがなかった。

■タニシとり 増水により家の前は水をかぶった田んぼがつながって広大な池となっていた。大人のぶかぶかの長靴を履いて歩き回り、タニシをバケツ一杯集めた。刈り取り後の田んぼは水の流れできれいに清められ、表面はビロード布のようだった。タニシが動き回った痕は、生乾きの土壁に線を引き出したように残るので見つけやすい。タニシは煮上げると、しこしこしておいしかった。調子に乗って、今度エビガニを料理してみようよ！と小声で切り出してみたりした。鳥では、イナゴ、土筆などは、食材として話題に上ったことはなかった。恵まれた環境下、食べる必要・習慣が生れなかったのか、なにか因習に縛られるところがあつたのか、良く知らない。誰それが沢ガニを食べたつて！こんな噂は、学内でいじめの好材料になった。 一つづく

※1 祖母にわずかな小遣いをもらい、近所の友と連れだつて上沼田・荒川堤脇の釣具店「柿の木」を訪れ、気に入った小物を買うのが楽しみだった。

※2 天気予報が再開される前、終戦直後の昭和20年9月と10月には、枕崎台風と阿久根台風が相次いで襲来した。これは阿久根台風と思われる。枕崎台風では広島市内で大きな土石流が起き、死者一一〇〇名を超す大災害を出していた。

(慶応大学名誉教授)